

JISK

(司法手続き仲介者
スターターキット)

モジュール7

合理的配慮

www.justiceintermediary.org





はじめに

2006年の「障害者の権利に関する条約」第13条は以下のように述べています。

「締約国は、障害者が全ての法的手続（捜査段階その他予備的な段階を含む。）において、直接及び間接の参加者（証人を含む。）として効果的な役割を果たすことを容易にするため、手続上の合理的配慮及び年齢に適した合理的配慮が提供されること等により、障害者が他の者との平等を基礎として司法手続を利用する効果的な機会を有することを確保する。

「障害者の権利に関する条約」では、障害者がその権利を行使するためには、修正および調整が必要であることを述べています。これらは合理的配慮として知られ、それにより障害者が社会の中で平等に参加できるようになるとしています。

「合理的配慮」は「障害者の権利に関する条約」では、以下のように定義されています。

「合理的配慮」とは、障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。
(第2条)

刑事司法の文脈では、合理的配慮によって、証言や手続きの規則が緩和されることはありません。
—合理的配慮は万人に公平な条件を提供します。

〔合理的配慮〕とは何ですか？

合理的配慮により、その人の障害が日常生活に与える影響を最小限に押さえます。それは予想に基づき、事前に準備するものです。

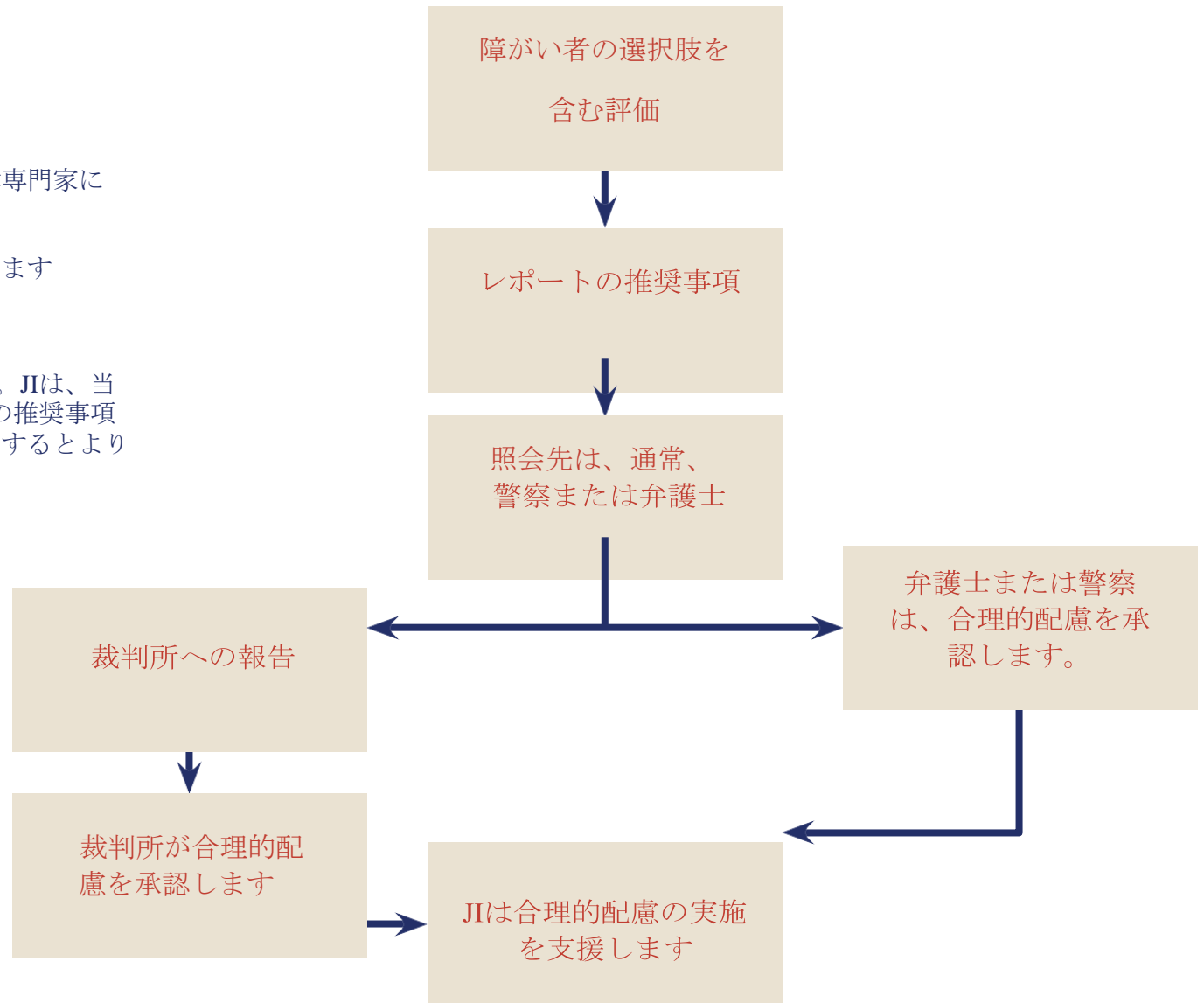
合理的配慮は個別的なものです。つまり、障害名は同じでも必要性は人によって異なるため、当事者と合意することが大事です。

司法の分野では、障害者（児童を含む）は、適切な手続的配慮に対する権利を有するとしています。国連：「障害者の司法手続きの利用の機会に関する国際的原則および指針」（2020年8月）の原則3



誰の決定ですか？

- 実際には、合理的配慮を承認する最終決定は法律専門家に委ねられています
- 法廷では、裁判官または治安判事が責任者になります
- 警察署では、面接官がその決定を下します
- 司法仲介人（JI）には助言をする役割があります。JIは、当事者と相談の上、合理的配慮を提案します。JIの推奨事項は、評価と報告に基づいています。これを図式にするとより見やすいでしょう。





合理的配慮のカテゴリー

効果的な参加を増やし、正確で信頼性が高く一貫性のあるコミュニケーションを最大化するために、合理的配慮が推奨されます。

このモジュールでは、世界中で利用されている多くの合理的配慮の詳細を扱います。

これらについて考えやすくするために、カテゴリーに分けてあります。各合理的配慮は、障がい者のニーズの評価に関連しています。地域のニーズや個人に合わせて、時間の経過とともに必要となる多くの新しく革新的な他の合理的配慮が存在するかもしれません。

一般的な環境

環境が、障害の有無にかかわらず、人びとの効果的なコミュニケーションに影響を与える重要な変数である点を考慮してください。

自宅環境で原告/証人に面接することは、彼らをよりリラックスさせるという目的において、あるいは彼らが家を出たくないという理由で（広場恐怖症、見知らぬ人への恐れ、移動の問題などの多くの理由で）適切な合理的配慮であると言えます。

ただし、慣れた環境でトラウマ体験を開示することの影響については、いくつか考慮すべき点があります。それ以降、部屋がフラッシュバックやトラウマ反応の引き金になるという証拠があります。

警察署で聴取する場合、一部の国では、警察署から離れている、または、別の入り口がある非公式の面接室が用意されています。トラウマを抱えた多くの犠牲者にとって、家庭的な装飾が施され、快適な椅子/ソファのある部屋で、飲み物と近くにトイレ設備がある状態で面接を受けると、参加の程度に影響が生じます。多くの人びとは、たばこの休憩と一人になる時間だけのために、外の空間へすぐに出られる出口があることを知りたがっています。

法廷では、その性質上、形式を重視する必要があり、長年の伝統に基づいているため、柔軟性がありません。しかし、JIは法廷を新鮮な目で見る必要があります。法律の専門家はしばしば、自分たちの環境に慣れすぎていて、一般の人にとって法廷環境がいかに奇妙に見えるかに気づかないのです。小音量の反復ノイズや明るい光は、感覚過敏を引き起こす可能性があります。多くの場合、弁護士は被告に背を向けているため、効果的な聞き取りができない可能性があります。

そのため、JIは、当事者が最も効果的に参加できるように、従来の環境を変える合理的配慮を推奨します。



時間と休憩

面接中または法廷での時間帯や休憩の頻度について、合理的配慮を推奨しなければならない場合があります。たとえば：

- 当事者の薬が午後の妄想症の症状を管理するのに最も効果的である場合、証人が法廷に出頭したり、面接を受けたりするのは午後にする必要があります。
- 当事者の集中レベルが非常に低い場合は、追加の休憩を融通する必要があります。また、IIまたは障害者に追加の休憩を融通する柔軟性も必要となる場合があります。
- 疲労が問題となる場合、裁判所は証人に対して、一日の終わりに法廷で証言するよう求めるべきではありません。被告にとって、裁判所は1日に座っている時間を減らすか、長めの昼休みをとるかする必要があります。



着座と位置決め

評価、面接、法廷での障害者の座席位置を考慮することが重要です。たとえば、よく聞けない場合は、他の人の近くに座ったり、他の人と直接向き合うことが役立つでしょう。物理的な接触の可能性がある場合、彼らは不快に感じるので、彼らは距離を保ちたいと思うかもしれません。

彼らは他の人に背を向けて座ることを好むかもしれません。

個人情報の開示。彼らは、対立的であると解釈される可能性がある、直接向き合う形式よりも、面接官に対して直角の位置にいる方を好むかもしれません。彼らはアイコンタクトを好まないかもしれません。

法廷では、質問者は、立つかわりに座ることで、障害者の不安を軽減することができます。非常に広い法廷の向かい側から話すと、より威圧的に感じられる可能性があります。質問者は証人ボックスに近い位置に移動することで状況を改善できます。法廷には、感覚過敏のある人が耐えられない刺激（音、光、動き）に満ちている場合があります。たとえば、裁判官は、裁判所の

案内係に対して、法廷からの出入りを最小限に抑えるよう求めたり、オンライン会議中にすべての参加者に対して、背景音を最小限に抑えるために「ミュート」するように求めることがあるかもしれません。

国によっては証人が立って証言することが求められるため、極度の不安に陥っている人や、痛みや立つことができないことなどの身体的な制約のある人のために、座席の位置の合理的配慮が必要となるかもしれません。

テクノロジーが利用できる場合は、法廷の外の部屋（同じ建物内、警察署内、または自宅から）から証言を行うことで、証拠の質を向上させることができます。

その場合、IIは、証人と並んで法廷のテレビモニターに映るようにします。

法廷で証人の周りにスクリーン/カーテンを使用すると、不安を軽減し、容疑者を加害者から保護し、証言の質を向上させることができます。IIは、弁護士と裁判官の両方の観点から、証人のそばにいます。



服装

目撃者/原告および容疑者が警察の面接を受けている場合、衣服の面で合理的配慮することができます。求められた場合、捜査官は制服の代わりに、堅苦しくない服を着ることがあります。

法廷での合理的配慮には、裁判官と弁護士のフォーマルかつ伝統的な服装を、堅苦しくない服装に交換するよう要求することが含まれます。かつらとガウンが伝統的なイングランドとウェールズではしばしば、特に幼児の証人や不安の強い人びとについては、これらを取り除く合理的配慮が行われます。その一方で、それ以外の人びとにとって、フォーマルな服装の存在は、法廷への関与の深刻さと重要性を理解し、裁判官が誰であるかを特定するのに役立つこともあります。JIは最も適切な合理的配慮について推測する前に、本人の見解を確認する必要があります。

本人の好みに応じて質問者の性別を指定する必要があるかもしれません。明らかにこれは微妙な問題ですが、例として、重度のトラウマを抱えたレイプ被害者が男性の面接官（または男性のJI）とうまくコミュニケーションをとれないかもしれません。サービスはこのような問題に敏感である必要があります。

支援者の存在

評価、面接、出廷中に家族/友人/サポートワーカーが同席できるよう合理的配慮してください。

たとえば、重度の不安やパニック発作のある人が通常、これらの症状を管理する方策を担っている介護者によって自宅で支援を受けている場合、介護者を面接室のすぐ外に座らせるか、その人のそばに座らせると役に立つかもしれません。

証拠の汚染についてリスク評価が必要ですが、その介護者が証人でもある場合、それは起こりません。これについては、事前に面接官と話し合うのが最善です。

JIが介護者の使用する戦略を学ばねばならない場合があることは明らかです（たとえば、パニック発作の管理を補助する場合）。また、それを障害者に対して活用しなければならない場合もあります。そうすることで、JIは適切なサポートに自信を持つことができるようになります。

並外れて
冗長かつ
矮小な言語
表現が当面の
必要性を十分
達成するときに、こんな大げさな
言葉を使用しないで下さい。

言語

評価の結果に基づいて調整を必要とする言語領域の問題が多くあります。これらについては、次のセクションで説明します：

- 話す速度と口調
- 語彙のレベル
- 文法のレベル
- 質問の複雑さ
- 独力でストーリーを語る能力
- 時間、方向、距離に関する質問
- 読み書きの能力のレベル。



1. 話す速度と口調

言語の処理や短い情報の保持が苦手な場合、IIは会話や質問のペースを遅くする合理的配慮を推奨する必要があります。質問者にはもっとゆっくり話すよう勧めるべきです。

同様に、その人が自分の考えを整理し、言い方を決めるのに苦労しているとしたら、インタビュー/質問者は彼らに時間をかけてもいいと言うべきでしょう。他の人が話していないとき、黙ったまま座っていることは難しいかもしれませんが、沈黙は、何を言うべきか考えまとめるのに役立ちます。これは、調査の聴取の段階または裁判の証拠提供段階で可能となるでしょう。



2. 語彙のレベル

多くの人にとって司法制度で使用される言語を理解するのが難しく、語彙は誤解される可能性があります。コミュニケーション支援の必要がある人びとに特に当てはまります。

IIは、より一般的な語彙のみを使用し、他の人が使用する語彙を単純化するスキルを養う必要があります。IIはまた、他の人が複雑な言葉や法的な専門用語を使用しないように勧めるべきです。

たとえば、

- 証拠、軽減、起訴、ドック（訴訟事件一覧表）、陪審、評決などの法律用語を避けてください。
- sentence、case、matter など、法制度の領域以外で別の意味を持つ言葉は避けてください。
- 比喻など具体的でない言い回しは避けまます。例えば、「keep your head down」（目立ちすぎて標的にされないようにする）という表現を聞いた自閉症の被告が、裁判中頭を下げていなければならぬと誤解し、ずっと不自然な姿勢をで座っていました。どの言語にも、何気なく使っているこうした表現があるでしょう。

3. 文法のレベル

複雑な文法構造を理解または使用するのに苦労する可能性がある場合。文法はそれぞれの言語に固有のもので、IIは、自分のコンテキストで何に注意すべきかを理解し、文法を単純化することを推奨できます。以下の例は、英語の文法に関連しています：

- 受動態の使用は避けてください。たとえば、「トムはジョンに打たれた」は、トムが打ったと理解される可能性があります。
- 文中で否定形は混乱を招く可能性があるので使用しないようにします。たとえば「家を出ないつもりだったのですか？」は「家にいるつもりでしたか？」や「家を出るつもりでしたか？」に修正する必要があります。
- トラウマの出来事について話したり質問したりするときは、現在形を使用しないでください。そうするとトラウマをよみがえらせる可能性があります。代わりに過去形を使用してください
- 「付加疑問文」などの他の複雑な文法構造の使用は避けてください。これは、「トマトを食べますね」や「あなたはトマトを食べませんでしたね？」などの「付加」が続く文を指します。このような文には、肯定と否定の両方が含まれています。これらは処理が困難です。



4. 質問の複雑さ

すでにその一部は上記のセクションで説明されていますが、質問をできるだけ単純に保つために、質問の複雑さに注意を払う必要があります。たとえば

- 選択肢を与えると、複雑さが増したり、考えられる答えが制限されたり、誘導尋問になったりする可能性があります。たとえば、「パン屋に行くところでしたか、それとも必要なパンをすでに購入していましたか？」は、「どこに行っていたのですか？」または「パン屋に行くところだったのですか？」または「パン屋に行くところだったのですか、それとも他の場所に行くところだったのですか？」に単純化することができます。
- たとえば、「選択式」の質問に「上のいずれでもないその他」を選択肢として含めないようにすると役に立つことがあります。たとえば：「ピタパンが好きですか？それともバゲットですか？それとも何か他のものが好きですか？」理解が限られている人や、人に従う傾向がある人は、最後の選択肢に同意する傾向があります。多くの場合、自由回答式の質問の方が効果的です
- 質問は短く、1つの部分からのみ構成されるものにする必要があります。たとえば、「家に帰る前に店や映画館に行きましたか？」は、「家に帰ったことについて質問させてください」「あなたはどこに行きましたか？」「お店に行きましたか？」「映画館に行きましたか？」に簡略する必要があります。（これらの質問はそれぞれ個別にする必要があります、証人の回答によってはすべてが必要なわけではありません。）
- 質問には、「...に関連して」「いつか覚えていますか...」などの導入フレーズや、「問題となっているこの日」「スノーおじさんに会ったとき」などのすでに十分に受け入れられている不要な情報を含めるべきではありません。これらのフレーズは、コミュニケーション障害者にとって処理負荷をかけ、文のどの部分に焦点を当てるべきか理解するのが困難となる場合です。

5. 事前の質問

一部の法域では、裁判所は、審理に先立って弁護士および検察側に、JIに書面で質問を提示するように要求しています。このように

JIが意味を変えずに質問を単純化し、議論のためにこの助言を提供できるようにします。弁護士側、検察側、そしてJIが裁判官と会い、その裁判官が、JIの提案が受け入れられるかどうかを決定します。

だからといってそれは、主たる証拠や反対尋問での質問において、自発的な変更を排除するものではありません。ただし、JI介入の数が減り、陪審員の質疑応答の流れが改善されます。

合理的配慮の本質は、JIの公平性と中立性が認識されている点にあります。

裁判官はしばしばこの機会を利用して、許可される質問の長さや対処できるトピックを決定します。たとえば、一部の裁判所の裁判官は、障害者の尋問は2時間以内にすべきであると裁定しています。

反対尋問とは、事情を説明すること、すなわち、証人に対してお前は嘘をついていると伝えることを意味しますが、裁判官はこれを、非常に幼い子どもや心理社会的障害をもつ大人に対しては許可しない、と決めることができます。



その後、弁護士は閉会のスピーチ中に陪審員に対して主張を述べることができます。

当初、準備された質問のこの概念は、法律専門家の間で支持を得るのが困難でした。しかし、イングランドとウェールズでは、多くの弁護士が、この慣習が言語を簡略化するスキルを磨くのに役立つと言い、彼らはしばしばこれらを使用します。

障害に関係なくすべての証人が使えるテクニック。



JIがどんな人の役に立てるかをどう決めたらいいでしょうか？

6. 独力でストーリーを語る能力

証人または容疑者として聴取を受ける人にとって、自分のストーリーを語るができることが不可欠です。

その人が自分で話しをするのが苦手な場合、JIは可能な限り、関連情報の詳細を説明しやすくするための合理的配慮について考える必要があります。たとえば：

- 中断せずに自由な流れの説明をするよう助言し、その後、面接官が説明の各セクションについて質問し詳細を確認する場面が続きます。「昨日何が起こったのか教えてください」……できるだけ長く待ってから続けます。「さあ、最初に戻りましょう。あなたはどこにいましたか？そこには他に誰がいましたか？」
- 予定表、人体図、目撃者の絵などの視覚補助を使用します。
- 本人にとって、質問されたことを口頭よりも書いたほうが答えやすいなら、JIは書かれたことを読み上げるか、それを裁判所に渡すかする。
- 手話の知識を持つ非言語的証人の場合適切な通訳が必要になります。JIが同じ手話に堪能である場合、これは二重の役割になります
- 中には拡大代替コミュニケーションを使用する人たちもいます。JIは、このような特定の補助機能を知っている必要があります。そうでなければ適切に援助できるようにするため、それに関する専門家に協力を求める必要があります。

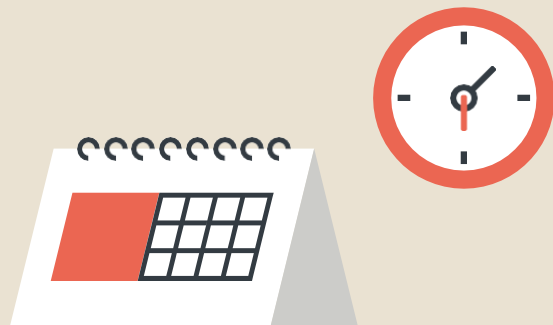
「PEACEアプローチ」の詳細



7. 時間、方向、距離に関する質問

時間、方向、距離の概念は、知的障がいや認知症などの特定の障がい人びとにとっては難しいことがあります。

- 時間と時期は、日付、曜日、時刻について話すのではなく、昼食前、朝食後、学校の日、宗教上の祝日や誕生日など、人が世界をどのように認識するかについて話す必要があるでしょう。
- 距離は、メートルやヤードではなく、「家いくつ分離れているか」や「バス停いくつ分か」という観点から話す必要があります。



8. 読み書きの能力のレベル

多くの人にとってはじめて司法手続きに関わる場合、これまで学んできたことと異なる高いレベルの読み書き能力が要求され、戸惑います。

IIは、これらの文書の理解を確実なものにするために、合理的配慮を求める必要があります。たとえば：

- IIが、文字や口頭で彼らに簡略化して伝えられるよう、事前に書面による文書を提供してもらいます。
- 書面を読み上げる宣誓が必要な場合、IIは、当事者が練習する時間を要求すべきです。また、短いフレーズに分けて読むことも、あらかじめ合意しておくともよいかもしれません。
- 陳述が書面でなされる場合、IIは、当事者が署名する前に理解していることを確認する時間が必要です。
- 一部の法域では合理的配慮が日常的になされ、「読みやすい」バージョンとして作成された文書が提供されています。

9. 迎合しやすさと被暗示性

人に合わせようとしたり、暗示にかかりやすかったり、人を喜ばせようとしたりする人がいます。特に権威者との会話や権威者からの質問の際に、それは顕著となります。このような人びとは、たとえば、誰かの陳述に対して、その人を喜ばせたいという理由から合意するかもしれません。したがって、IIは、本人が質問されることによって、信憑性の低い返答へと導かれまいようにすることが重要です。合理的配慮には以下が含まれます：

- 視覚補助を使用して本人が、選択肢を評価して決定を下す時間をとることができるようにします。たとえば、フローチャートを使用して、有罪を認めるかどうかの選択がどのような影響を及ぼすか示します。たとえば、手続きの諸段階と起こり得る結果などを示すことができます。
- はいいいえの選択式質問を避けます。「はいいいえ」で答えることによって、それ以外の回答ができなくなります。たとえば、「バスで仕事に行きましたか？」よりも、「どうやって仕事に行きましたか？」と尋ねたほうが良いでしょう。
- 付加疑問文（ポイント3で説明）や、「あなたは意図的に彼を殴ったのではないですか」などの誘導尋問は避けてください。
- すべて「はい」（または「いいえ」）で答えられるような質問の連続は避けてください。真の答えを良く考えずに、同じように答え続けてしまうかもしれないからです。



言語の簡略化

Jlはリアルタイムで言語を簡略化する必要があるため、このスキルを練習し習熟することが重要です。

以下の練習例は英語で示されています；モジュールが翻訳されると、例が該当の言語で示されます。

最初にこれらの例を書いて練習することを考えてみてください。その後で、文が話されているときにリアルタイムで簡略化してみてください。

一部の法域では、裁判所は、Jlが簡略化が必要な部分を示し、質問者が自分でこれを行うことを期待することしかできません。他の場所では、Jlが直接介入して簡略化することが認められます。

実践例



「この問題は係争中ではありません。」



「あなたが一杯食わされたということは誰も疑うところではありません。」



「それは誰にとっても恐ろしいことです。」



「お金を取ったあと、立ち去ったということですか？」



「合う約束を事前にしていましたか、それとも通りでお互いに偶然出会ったのですか？」



「13:00時に警察は捜索令状を執行しました。」



「私の思うところでは...あなたは東の方面に旅行していましたか？」



「あなたが目撃者として警察に申し出たというのは本当ですか？」



視覚補助

ほとんどの人は、複数のコミュニケーション手段を使用すると理解しやすくなります。つまり、視覚補助を使用すると、発言を理解しやすくなったり、視覚補助で情報の表現を補足すると、効果が高まったりすることを意味しています。

たとえば：

- 性的暴行に関連する事件などの場合、人の位置を示すために単純な棒人間の図面またはモデルを使用することができます。
- 時間の流れに沿って出来事を単純な線画で描画することで、出来事を順番に並べることができます
- 「わかりません」、「ゆっくりしゃべってください」、「理解できません」などの意思表示をするためのリマインダーカードを使うこともできます。
- 「はいいいえ/わかりません/その他」など絵で選択肢を示します。
- 出来事の理解を助けるための部屋のレイアウトの図面

集中力と注意力の管理

数分以上の出席が難しい人が、面接や法廷審問でずっと席に座るといことは、参加する能力を制限してしまいます：

- 休憩の回数を増やしてもらう。
休憩の長さにも配慮する。
- 当事者が裁判中にいじれる「気晴らしグッズ」の使用許可を求める。これは、集中力を高める効果があります。
- 「落書き」用に紙とペンを与えることを検討してください
- 当事者が、審理の進行が済んだところを自分でチェックできるようなリストを用意します。
- 被告人は、陪審員が法廷にいるときだけ法廷に出席すること。被告人は、法廷での議論と計画の間、休憩室に座っているようにします。IIは法廷に出席し、弁護人が本人に対して行う、「不在中に行われた手続きの説明」を簡略化する手助けをします。





感情の制御とトラウマ反応の管理

JJの役割は、その場における感情的な反応のすべてを最小限に抑えることではありません。障害者にとっては、事件に関連して自分の感情を示すことが重要かもしれません。ただし、感情的な乱れがコミュニケーションの有効性に影響を与える場合、JJは合理的配慮を検討する場合があります。たとえば：

- その人が安全だと感じ、防衛機制を緩め、感情を制御するのを助けます。そのためにJJは、法廷プロセスを適応させることや、証人と身体的に触れた状態を保つこと（腕に触れるなど）、質問への回答を中継して伝えることを推奨する必要があります。
- 人が立つ位置や座る位置を変えます。
- 快適な毛布や快適なおもちゃを持ち込みます。
- 休憩の回数を増やすことを許可します。



新しい状況を管理し、変化を制限する

新しい出来事、なじみのない人びと、予測不可能なことが苦手な人のために、JJは以下のような合理的配慮を提案することができます：

- 実際の面接予約日の数日前に面接の場所を訪れる。
- 環境に順応するために、裁判前に裁判所を訪問したり、実際に証人席に立ってみたり（裁判所の管理スタッフからの助けを借りて、誰もいない裁判所で）、ビデオリンクルームで、JJの用意した証拠とは関係ない些細な質問を試みたりする。
- 裁判色のない待合室でJJ立ち合いのもとで両方の弁護士と短い会合をする。
- 当人が進行状況をマークできるように、各法廷セッションの簡単なリストを用意する。



家庭裁判所に出頭した、ある母親は以下のように述べています。

JIの援助を受けた彼女の経験

文字起こしした音声

“ 私は、かなり後になってからASDの診断を受けました。行政機関との意思疎通が困難でした。私は我が子たちの治療と教育のネグレクトの疑いで家庭裁判所に連れて行かれました。そこで私は、自分の困難が認められなかった理由を知ったのです；私は高いIQで流暢に話すため、言葉の意味合いを理解していないことが理解されず、何年も係争しました。

何ヶ月にもわたる苦勞の末、私はついに仲介人に面会することができました。彼女は私たちに、不安や感覚過敏を軽減できる法廷の個室が利用できるよう手配してくれました。彼女は、法律チームと私の間のコミュニケーションを促進するために、彼らに対して、議題を作成し、それにしたがうよう促し、誤解が生じ始めるタイミングを特定してくれました。彼女はまた、裁判所と弁護人に話をし、彼ら全員が私のニーズを理解するよう取り計らいました。

その結果、私の証言の際には、私が答えることができる方法で質問をしてもらい、トピックの変更がある場合には合図してもらい、必要な休憩を取らせてもらうことができました。私は仲介人が手配してくれたありとあらゆる合理的配慮の重要性を強調しても強調しすぎることはありません。IQに関係なく、私の立場にあるすべての人に同じ機会を与えるべきだと強く信じています。このモジュールの最後に、モジュール5「体験談」で紹介した人たちへの合理的配慮を紹介します。”





ベン



ベンは長年にわたって統合失調症の診断を受けてきました。物理学専攻で大学を卒業しています。一人暮らしをしていて、人間関係を築くが苦手です。何年も働いていません。銀行員への嫌がらせで告発されています。薬物乱用の過去があります。

彼は自分の弁護をするために話し続けることや、長い質問に集中することが困難であると評価されました。彼は30分以上じっと座っていることができず、日中まで眠ることが習慣化していました。

当初提案された合理的配慮：

- 彼が法廷に出頭する時間を午後に修正します。
- 30分ごとに休憩を取ります。
- 彼が法廷環境に順応するように、審理前の訪問を手配します。
- 質問を短くします。

シム



シムは一般的な教育を受け、学校を卒業した後、地元のIT企業で働いていました。2年前、彼は自動車事故に巻き込まれ、外傷性脳損傷を負いました。後遺症として、主に認知的な機能障害が残りました。彼は可動性があり、身体的に独立しています。彼は事故以来、働いていません。彼はガールフレンドに対するDVで起訴されました。彼は事故後にいくつかのてんかん発作を経験しましたが、最近、発作は起きていません。

彼は薬を服用していません。精神科医による評価で、彼は、裁判中に仲介者の援助が得られる限り、抗弁する能力があると評価されました。心理学的評価により、彼は失語症（理解と表現に影響を与える後天性言語障害）と診断されました。

当初提案された合理的配慮：

- 法廷環境内にある、彼のてんかんに関連する危険因子をチェックします。
- IIは、シムの横に座って、すべての訴訟手続きを簡略化します。
- 質問の中の語彙の複雑さを考慮します。
- 質問には短く単純な文法構造を使用します。
- 陪審員に対して、シムは返答するまでに時間がかかり、沈黙の時間があるという点を説明します。
- シムが理解しているかどうかを確認し、理解していない場合にはその点を指摘します。



デビッド



デビッドは50歳で、不法侵入で逮捕されました。彼は全体として、受け身人間であり、すぐに他の人、特に権威のある人を喜ばせ、同意しようとしします。

彼をよく知っている人びとは言います。彼は何かのかどで告発されたら、すぐに罪を告白するだろうけど、そうすることで深刻な結果が生じるということを彼は理解していない、と。

評価を受けた結果、彼は意思決定や論理的推論、複雑な文章において苦勞していることが判明しました。彼の被暗示性と迎合性が懸念されています。

当初提案された合理的配慮：

- 質問された時に「覚えていません」や「わかりません」と言うことができることをデビッドが理解していることを確認します。
- 文法と語彙の観点から質問をシンプルに保ちます。
- 答えを示唆する質問は避けてください。「あなたはそれに同意するのですね。」などはそうした質問の例です。
- 「なぜですか」という質問は答えるのが難しいので、別の聞き方ができるか検討してください。

エヴァン



エヴァン（15歳）は知的障害があります。弁護士なしでの警察による5時間の尋問の後、自分と他の3人がどのようにして少女を攻撃して殺したか語りました。その後で彼は言いました。「これほどのプレッシャーを感じたことはありませんでした。私はずっとどなられ、脅されていたのです。私はただ話しを作り、彼らに話しました。家に帰らせてもらうために。」

彼が捜査官によって手書きで書かれた声明に署名し、家に帰りたと言うと、刑務所行きだと言われたのです。彼は「再拘留」の意味を理解しておらず、有罪判決を受けたと思って泣きました。

当初提案された合理的配慮：

- 彼は、警察の聴取の時にJIの支援を受けるべきです。
- JIは簡単な言葉でプロセスを説明し、理解をチェックします。
- JIは読み書きの能力を評価し、署名する前に彼が供述書を理解するための最善の方法について助言します。
- 警察は、エヴァンが確実に理解できるよう質問を作成する際にJIの援助を受けます。



ファチマ

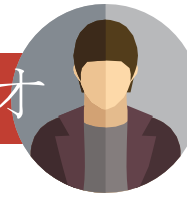


ファチマには知的障害と発達障害があります。警察がバーに到着したとき、ファチマは逃げようとしていました。警察は彼女に説明なしでミランダ権(*)を読みましたが、彼女は自分が何に同意しているのか理解していませんでした。彼女の親戚は、彼女が刑務所にいる間、または調査中に呼ばれることはありませんでした。

彼女は24時間刑務所で過ごし、支援も薬も入手することができませんでした。彼女の親戚は、成人拘置所の監督者に電話して、ファチマの必要とするものについて伝えました。すると、ファチマは自分のニーズや薬の情報について自分で看護師に言うべきだったと言われました。

*米国で用いられているミランダ権は以下のように宣言しています：「あなたには黙秘権があります。あなたの供述は、法廷であなたに不利な証拠として用いられる場合があります。あなたには弁護人の立ち合いを求める権利があります。もし自分で弁護士を雇う経済的余裕がなければ、公選弁護人を付けてもらうことができます。」

ジョルジオ



ジョルジオはこれまでずっと家族と一緒に引っ越しを繰り返してきました。落ち着ける家がなかったため、ジョルジオはほとんど学校教育を受けてきませんでした。彼は読み書きができません。ジョルジオの記憶によれば、彼は畑や動物の世話をして父を手伝ってきました。彼は去年フェアに行き、ある少女に会いました。

少女は、彼が彼女を性的に暴行したと言います。彼は、彼女が同意したと言います。彼は法廷手続きがどのように機能するかを理解しておらず、弁護士のかつらやガウンに非常におびえています。彼は実際の年齢の15歳よりも大人びて見えます。彼は正式な診断を受けていませんが、問題を解決したり、自分の経験について話したり、複雑な質問を理解したりするのが苦手です。



当初提案された合理的配慮：

- JIは警察の聴取で支援に入り、ミランダ権について説明すべきだった
- 拘置所に対して、ファチマは自分のニーズを伝えられないことを伝え、またコミュニケーションを取る方法に対してJIにアドバイスを求めるべきだったことを伝えます。
- 拘置所は、彼女の服薬管理のため、親戚に関わってもらうことを検討する必要があります。

当初提案された合理的配慮：

- 彼の法律チームとの会議中に彼を支援するために、JIを任命すべきです。
- JIは法廷で彼のそばに座り、手続きや複雑な言葉を説明する必要があります。
- JIは彼が事件文書を読むのを手伝うべきです。
- ジョルジオが証言するとき、JIは裁判所が質問を単純化し、彼が理解できるようにするのを助けるべきです。



アンリ



アンリは自閉症スペクトラム障害と診断されました。彼は、特殊教育学校に通う、14歳です。他の人とアイコンタクトをとらず、会話をはじめることもなく、比喩的な言葉やユーモアを理解できません。

友達を作ることがなかなかできず、ルーチンの変更が苦手です。字を読むことはできますが、複雑な文書の暗黙の意味を誤解することがよくあります。彼は、クラスの別の少年に性的に触れたと非難されています。

当初提案された合理的配慮：

- JIがすべての会議、出廷および証言を援助します
- アンリがビデオでつながった部屋から証言することを許可します。そこでは、大規模なグループと直接アイコンタクトをとる必要はありません。
- 遠まわしだったり、具体的でない言い方を避けます。
- 法廷では計画通りに事を進め、ヘンリーに影響を与えないようにします。たとえば、出廷や証言のタイミングを固定します。
- 自分の行動が他人に与える影響を認識しているかどうかについて、彼に尋ねないようにします。

イソベラ



イソベラは、母親が父親を殺したとき、その部屋に居合わせました。彼女には障害の病歴がなく、事件の前は授業助手として働いていました。しかし、その事件以来、彼女は心的外傷後ストレス障害の兆候を示し、パニック発作を経験し、人との社会的かかわりを避けています。

彼女は自分を傷つけることを考えたとき報告しました。薬により、突然日常生活に侵入してくるフラッシュバックを減らすことができましたが、自分の母親に対する起訴証人として法廷に出席することを要請され、彼女の不安レベルは上昇しています。反対尋問が彼女の精神的健康に有害であることが懸念されています。

当初提案された合理的配慮：

- イソベラが環境に順応できるように、裁判前の訪問を手配します
- ストレスを軽減し、トラウマ理解に基づくアプローチを検討します。
- 彼女が法廷に入る前に、彼女を弁護人と裁判官の両方に紹介します。
- 彼女の証言中に母親（被告）を見ないように遮るためのスクリーンを許可します。
- 証言後、必要なサポートが実施されていることを確認します。



ホセ



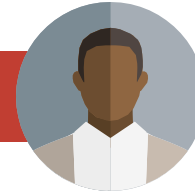
ホセは現在75歳で、認知症の初期の兆候がみられます。彼の行動範囲は限られており、聴力は低いです。40年以上前、妻と継娘と一緒に住んでいたときに、性的犯罪で告発されました。

彼は法廷で硬い椅子に座ったり、長期間座ったりするのが困難であると予想されます。彼は手続きに耳を傾けることはなく、情報の保持もしません。

当初提案された合理的配慮：

- ホセが裁判所の中でもよく聞こえる中央部分に座ることを許可します。
- 法廷で提示された証拠を思い出すために、視覚補助とメモを使用することをJIに許可します。
- 適切な座席を用意し、裁判官が部屋に入ったときに彼が座ったままであることを許可します。
- 頻繁に休憩を取ることと、公判の日数をできるだけ短縮するよう手配します。
- ホセが裁判所の業務中に休憩を取るため裁判所を離れることを許可します。

ハリド



ハリドは5年前に運動ニューロン疾患（筋萎縮性側索硬化症）と診断されました。現在車椅子を使用しており、彼の発話はなじみのない傍聴者にはほとんど理解できません。

彼は拡大代替コミュニケーション機器を持っていませんが、アルファベットの表と絵図の補助を使ってコミュニケーションをとることができます。

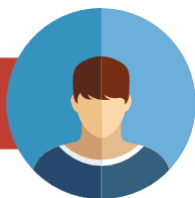
彼はすぐに疲れます。彼は警察に言いました。ある介護助手がハリドの入浴を手伝う際に、彼を身体的に虐待した、と。

ハリドは警察に、何が起こったのか正確に説明する必要があります。

当初提案された合理的配慮：

- アルファベットボードと絵図の補助を手配します。
- ハリドにとって最適な時間帯に短い面接セッションを設定します。
- プロンプトの使用を許可してもらいます。
- しゃべっていることが警察に理解できない場合、慣れ親しんだ聞き手に手伝ってもらうようにします。

レオ



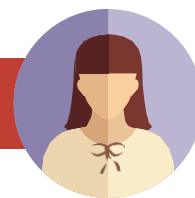
レオは5歳です。彼は自分の先生に言いました。叔父が泊りにくるときに彼にすることが好きではない、と。詳細は明らかではありません。

レオは正常に発達している子どもであり、年齢に適した言語スキルもあります。彼は自分の経験について警察官に話す必要があり、尋問を受けるために法廷に行かなくてはなりません。レオが警察官に会うとき、どの合理的配慮を提案しますか？

当初提案された合理的配慮：

- おもちゃの人と人体図の使い方を紹介します。
- 背の低い椅子など、幼い子に適した面接室の環境を整えます。
- レオが使っている語彙を使用して、彼が答えられるように導きます。
- 面談をビデオ録画します。
- レオが絵を描くのが好きなら、証拠の一部として彼の絵を使います。
- 法廷に入る代わりに、ビデオリンクルームを使用し、そこで反対尋問を受けることができるよう裁判所に依頼することを検討します。
- 環境に順応し、裁判官と弁護士に会うために、審理前の訪問を手配します。

マリア



マリアは人生のほとんどを介護施設で過ごしてきました。彼女には、重度の身体的障害があり、口頭でのコミュニケーションも非常に限られています。彼女が入所しているケアホームの他の居住者から、彼女はスタッフから言葉の虐待を受けているとの申し立てが複数件ありました。

警察は、この件に関するマリアの証言の意志を確認したいと思っています。

マリアは警察官と会いたくありません。彼女はおびえていて、状況を理解していません。彼女が証言できる状態になる以前に、信頼関係を築くための時間が必要です。彼女には時間の経過の概念がないので、すぐにそれを行う必要があります。

当初提案された合理的配慮：

- JIはマリアとの信頼関係を築き、彼女の理解のレベルや、彼女とコミュニケーションをとるための最善の方法を理解するために時間が必要です
- 警察に対して、正式な聴取前にJIとともにマリアを訪問し、彼女と顔見知りになるよう依頼します。
- 慣れ親しんだスタッフの同席が必要な場合は、マリアと会うのに最適な環境を検討します。
- マリアと一緒に考えたスケジュールを使用して、彼女が自分の経験を語るのを助けます。

ノア



ノアには多くの不安があります。彼には、見知らぬ人と話す能力に影響を与える社会恐怖症があり、パニック発作を起こすことがあります。

薬を処方されていますが、常に従っているわけではありません。彼には自傷行為の過去があり、新しいトラウマがその傾向を悪化させることが予想されます。

彼は、自分が入所している介護施設にいる別の居住者に嫌がらせをしたとして告発されています。彼は警察からの聴取を受ける必要があります。

当初提案された合理的配慮：

- ノアが面接中に休憩を要求することを許可します。
- パニック発作を最小限に抑えるための戦略と、パニック発作が発生したときに最善の対応をする方法についてノアに尋ねます
- 何が起きているかについて行けない場合、JIは面接を開始する前に彼に訴訟手続きを紹介します。
- 通常の警察の取調室よりも堅苦しくない環境を選択します。
- 面接の前後にノアに薬を使用するよう勧めます。

オリーブ



オリーブには長期間にわたって薬物を乱用してきた過去があります。彼女は何年もの間ホームレスでした。彼女の最後の医療報告によれば、彼女には知的障害と妄想型統合失調症があります。彼女は脅威を感じると言葉が攻撃的になります。

彼女は、路上での殺人の目撃者として法廷に出席するよう依頼されています。

評価によると、彼女の言語理解は非常に貧弱であり、新しい人に会うことが苦手です。

当初提案された合理的配慮：

- 裁判前の訪問と、可能であれば、弁護士と裁判官との最初の会合を手配します。
- 質問は短く、簡単な語彙で行います。
- 出廷のための時間を固定し、彼女が待たなくてもよいようにします。
- JIは各段階で彼女を援助します。



合理的配慮と司法制度

合理的配慮には法的要件を伴う場合があります。ただし、現行のサービスでは、JIが推奨する合理的配慮が許可されるかどうかは依然として裁判所の決定に委ねられています。

この点については、「基本規則のヒアリング」(Ground Rules Hearing)で議論するのが最善でしょう。これは裁判所が、推奨事項と、与える（または与えない）権限について検討を行うための公聴会です。これは、JIと裁判官を交えて質問事項が議論される場でもあります。詳細については、**モジュール10「実践的課題」**を参照してください。

法廷においてではなく、面接や会議において合理的配慮が必要な場合は、当人が到着する前に法律専門家/警察と合理的配慮について話し合うのが最善です。JIは、会合の結果に固執するのではなく、プロセスに対して中立的かつ公平なアシスタントとしての役割を強化することができます。

面接官が合理的配慮を順守する責任を負うため、当人とやりとりにおいて衝突や繰り返しが少なくなります。

JIによる介入

介入は、科学のように答えが1つではありません。言い換えれば、介入の方法にはそれを実践する人によって違いの余地があります。証言の最中、JIは、合意された合理的配慮が順守されているかどうか、そして介入するかどうかを考える必要があります。

介入するかどうかの決定には、徹底的な集中力と一瞬のタイミングが必要です。遅すぎると、その人は介入前に答えてしまいますし、早すぎると、裁判所は、JIが証人を保護しようとしている、または証拠を汚染しようとしていると考えるかもしれません。

証言の最初のうちは複雑な質問に対処できるかもしれませんが、多くの質問で過負荷になった後は、同様の複雑な質問を完全に理解するのが困難となります。

障害の影響は変動する可能性があります。

誰にも良い日と悪い日があり、前述の通り、コミュニケーションの有効性は多くの変数の影響を受けます。詳細については、**モジュール4「コミュニケーションを理解する」**を参照してください。

人は、実際の訴訟中よりも評価時にパフォーマンスが低下する可能性があることがしばしば指摘されています。またはその逆の場合もあります。

つまりそれは、扱われるトピック次第という側面があります。たとえば、評価の感情的な要素は、事件に関するコミュニケーションと比較して、抑制される傾向があります。

その一方で、障害者は、事件について話したり質問に答えたりする場合、架空の状況が説明される評価の場合と比べて、事件に関与した人物の名前など実際の文脈を理解することができます。



法制度は矛盾に対して寛容ではありません。コミュニケーションスキルにおけるこのような変動は、JIの勧告の信頼性に影響を与える可能性があります。

その人のメンタルヘルスの状態は、任意の2日を取り上げて比較した場合、あるいは任意の2つの環境で比較した場合、または同じ日の2つの時間帯で比較した場合、大きく異なる可能性があります。

JIは、このような変動の可能性を報告書やもしあれば、「基本規則のヒアリング」で強調すべきです。それは、JIが実際のニーズを満たすために「リアルタイム」で介入するのに役立ちます。



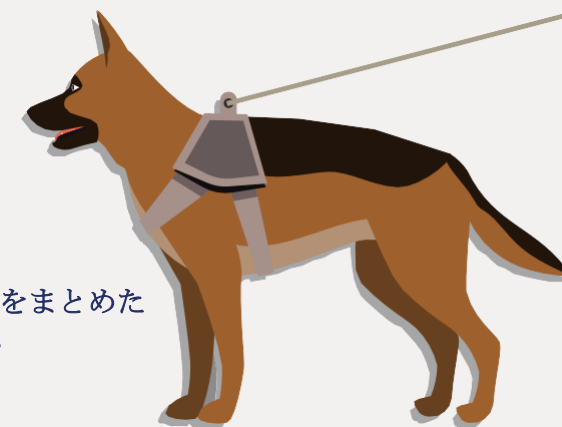
「既存の枠組みにとらわれずに」 考える

適切な合理的配慮を見つけられるかどうかは、JIの創造力と地域の司法制度の柔軟性によります。「既存の枠組みにとらわれずに」で考え、どんな合理的配慮でも一番初めがあるということを意識します。

「既存の枠組みにとらわれずに」考える例：

- 証人が質問に答えている間、カメラに背を向けて床に座ることを許可します。
- 子どもの目撃者が聴取中におもちゃの掃除機で遊ぶことを許可します（評価の最中に「片付け」を許可された子どもは、不安の程度に低下がみられました）。
- ある被告は、優れた表現力を示しつつも、過度に不安になったり行動が躁病的になったりした際には、特定の質問を処理することができませんでした。JIは、被告が、主たる証拠を、質疑応答形式ではなく、裁判所への一つの連続した説明としての提示を許可することを提案しました。
- 不安を管理するためにペットの犬を面接室に連れて行くことを許可します。
- 子どもの監護権をめぐるヒアリングの最中に、極度の不安に陥っている母親に対して、いつでも法廷を離れてよいと許可します。その間、JIはメモを取り、次の休憩の際にその内容を伝えます。

「すべての合理的なステップ...」は、推奨される合理的配慮をまとめたものであり、このアプローチを奨励する内容となっています。





考察ツール：モジュール7

ここでユーザーの皆さんには、モジュールの内容を振り返っていただきます。また、私たちがコンテンツの改善と更新を継続的に行う手助けをしてもらえれば幸いです。

それでは、あなたの考察を共有するために、

ここをクリック
してください。

これらの合理的配慮は、あなたの地元の司法制度ではどのように機能していますか？

警察と裁判所のどちらが、承認を得やすいでしょうか？どちらが承認を得にくいでしょうか？

あなたは、推奨事項の裏づけとして評価の情報をどのように活用しますか？

次ページに続く...



あなたは、推奨事項の裏づけとして評価の情報をどのように活用しますか？

これらの調整を実施する際には、中立性を維持することの重要性を考慮してください。すべての人がこのこのことを理解していることをどのようにして確認しますか？

あなたの言語で文書または一連の質問を簡略化してみてください。

あなたの創造力次第で、適切な合理的配慮を見つけられるかどうかが決まることがよくあります。
「既存の枠組みにとらわれずに」考え、どんな合理的配慮でも一番初めがあるということを意識します。